

教育再生実行会議（第9回）議事要旨

日 時：平成25年6月6日（木）9：00～10：30

場 所：首相官邸4階大会議室

出席者：安倍内閣総理大臣、下村文部科学大臣兼教育再生担当大臣、杉田内閣官房副長官、
福井文部科学副大臣、谷川文部科学副大臣、丹羽文部科学大臣政務官、義家文部科学大臣政務官、遠藤衆議院議員、富田衆議院議員及び有識者14名

○ 冒頭、安倍内閣総理大臣から挨拶があった。

まず、先月28日に本会議の第三次提言を鎌田座長からいただいた。委員の皆様には、提言のとりまとめに尽力いただき、改めて御礼申し上げる。

この提言を、今後策定する成長戦略にしっかり反映していきたい。

本日から、大学入試をはじめ高校と大学の接続の在り方について議論いただく。教育再生の目標の一つである世界トップレベルの学力を目指すとともに、第三次提言でまとめていただいた世界に伍する大学をつくっていくために、高校と大学の接続の在り方は極めて重要。

とりわけ、大学入試の在り方は、大学教育、初等中等教育の双方に与える影響が大きく、国民の関心の極めて高いテーマ。

逆に言うと、大学入試に過度にエネルギーを集中せざるを得ないことが、我が国の教育の問題点。

子どもたちの能力を最大限引き出し、これからの時代に求められる力を育成するために、幅広い観点から議論いただきたい。

○ 中央教育審議会高大接続特別部会の安西部会長から、中教審でのこれまでの審議状況等について、1)「高大接続」は高校までの教育、大学入学者選抜、大学教育を一体としてとらえる必要があること、2)ペーパー試験だけでなく、多面的・総合的に評価するための選抜方法の検討が必要であること、3)評価手法として、パフォーマンス評価（作品をつくる等）など総合的全体的な評価の仕方を考えていく必要があること、という観点が大切であり、これまで高大接続特別部会においては、高校教育の質保証のための取組を充実させること、検討されている「高等学校学習到達度テスト（仮称）」を就職試験や推薦入試等に活用していくこと、大学入学者選抜では多面的・総合的評価が必要であること、検定・資格制度の活用を図ること、大学入試センター試験については教科・科目が細分化しており見直しが必要であること等の議論を行っていることが説明された。

また、教育弱者が切り捨てられないよう、大学入学者選抜における公正さに留意すること、受験者や保護者等に対する大学の情報公開の推進が不可欠であること、世界トップレベルを目指す大学は世界基準で入学者選抜方法を工夫すること、今後小中高校の先生が大幅に替わる中で新しい教育理念を持った先生を養成できる仕組みの導入、アルバイトせずとも勉強に専念でき海外留学の機会が影響を受けないよう奨学金の整備が必要であること、大学教育の質的転換には財政支援の強化が必要であること、大学のガバナンス、マネジメント改革が必要であること等について意見発表があった。

- 高大接続・大学入試の在り方について討議を行い、各有識者等より発言があった。

(遠藤衆議院議員)

○ 安倍政権を支えようと自民党教育再生実行本部を設置した。まずは、グローバル人材育成のため、英語教育、理数教育、ICT 教育について議論した。その後、6・3・3・4 制の見直しなど「平成の学制大改革」、新入材確保法による教員の資質向上、そして大学・大学入試の抜本改革について議論した。集中的に議論を進め、グローバル人材育成については4月8日に、学制改革、新入材確保法、大学・大学入試の改革については5月23日に総理に提言を提出した。

この提言は、ひとつは、戦後教育の特徴であった「結果の平等主義」を廃止し、子どもの能力や成長スピード等を生かした多様化、複線化した制度での人材育成を基本にしている。2つ目に、小中一貫など確固たる教育理念に基づく効果的・効率的な人材育成、3つ目に、初中教育全体をしばっている大学入試の抜本的改革、「点数輪切りの一発勝負」から多面的な活動評価への転換を提言した。入試改革の具体的提言として、高校在学中に複数回挑戦できる「達成度テスト」の創設、大学入試センター試験を廃止して「達成度テスト」を活用すること、ただ、廃止については受験生への配慮をして文書には記載していないが。また、英語試験を廃止して TOEFL などの試験を受験の条件にすること、「達成度テスト」をベースにした多様な学習評価等、また、国際バカロレア認定校の大幅な拡大についてとりまとめている。

(加戸委員)

○ 大学入試の問題を高等学校教育にタッチしていない大学教官が作ることに根本原因があり、だから、大学に入るために予備校に通うことになる。大学入試の問題は、少なくとも高校の経験者等が作成するか、原案を作って大学が採用するようにすべき。

高校教育を正常に受けていれば入試試験で高点数をとれる仕組みにするためには、入試オンブズマン制度のようなもので、「この大学の問題は極めて不適切」というのが3年続けば、助成金・交付金を減額するとかしないと、なかなか解決しない。

(貝ノ瀬委員)

○ 入試の在り方が義務教育の段階まで大きく影響する。

特に、一発勝負で大学を決めるやり方は見直さなければならない。高校教育は指導要領に基づいているが、じっくり高校教育に専念できる状況になっていない。高校生にとって勉強とは、受験勉強することになってしまっている。義務教育段階から主体的な学びをどう身につけるかを考える必要がある。学力だけでなく総合的に評価することになると、義務教育段階からの学習履歴、ポートフォリオの蓄積を入試に活用してもいいのではないか。

また、全体に関わるが、子どもの自信を付けるための自尊感情、肯定感を幼児の段階から親も含め社会全体で意識を持って育てなければならない。

(鈴木委員)

○ 推薦・AO 入試における学力担保の問題が非常に大きくなっている。これらに到達度テストが活用されるのであれば、12月～1月に数十万人の受験者が発生することへのインフラの整備が必要。到達度テストで早々に高得点を挙げた学校では、授業が形骸化し成り立

たない可能性がある。逆に、小学校からの一貫校では高校段階で学力が不足し大学に入れないこともあるのではないか。

AO入試は、入学定員確保のための手段となってしまっている。廃止した方がいい。

バカロレアについては阻害要件がある。バカロレアの内容のレベルは決して高くない。数学を英語で教えた場合、かえって日本の数学のレベルが低下しかねない。大学にもあまり普及していない。海外留学について高校の先生の意識が低いこともある。

高校生には短期間の留学体験が一番いい。海外や英語への恐怖感を取り除く力になる。外部検定試験は、文部省、大学入試センターが率先して国産の英語力検定試験を開発すべき。

(安倍総理)

○ 大学入試について、高校が事実上予備校化しているという課題もある。AO入試を導入するときには、大学入試の在り方に一つ穴をあげようということだったが、政策はそのとき政策をつくった人の思惑どおりの結果には、なかなかならないということの一つかもしれないという印象を受けた。

小中高大とつながっていく中で、大学入試の在り方そのものにより全体に大きな影響が出てくることを改めて認識した。

(八木委員)

○ 勤めている大学では、年間8回入試をしており、一年中入試業務がある。入試に大学が振り回され、本務がおろそかになっている。また、何種類も入試があり、入ってくる学生の学力にばらつきがある。編入・転入試験では、学力の低い学生が他の大学を経由して入学することもある。

第三次提言では、大学を、学生を鍛え上げる教育機関に変えるとした。高校段階においても整合性を持たせ、鍛える教育に変えていくべき。そうでなければ、グローバルな競争に勝ち残れない。現行では怠けることを許容する教育、入試になっている。

達成度テストを導入する場合にも、受験年齢を下げ、あるレベルに達している場合には、大学に入学できるようにするという事も考慮してはどうか。

(川合委員)

○ 高校の学習の質の保証については、提案されている達成度テストを実施して、きめ細かな質の保証をする方向でよい。達成度テストが終わると、その後学習しなくなるということについては、大学入学資格を早期に与え、高校を短縮してでも卒業できるシステムに変えていくのがいいと思う。諸外国は非常に早くに「優秀な方」を高等教育に動かすシステムがあり、私が見た中では、21歳で既に博士の学位を持っているイギリスの青年がポストドクで来たことがあった。

また、大学入学試験と高校教育の質の保証は切り離して考えるべき。高校教育の質の保証は、大学入学資格として利用するのが適切。大学教育の中で高校の達成度テストの結果を反映した形で大学のコースが選べるようにしておけば、大学入学後につながる教育を高校で目指せる可能性がある。入試は大学の特徴によって入学の条件が変わるので、そこは大学の個性を反映できるようにするのが大学の独自性を育てる上で有効。

現在のセンター試験への批判があるが、高校の指導要領のコースそれぞれに1対1で対

応するように試験を作るという発想に基づいているからだと思う。達成度テストに近い考え方がセンター試験に反映されている。そこを切り分けて、入試において個々の大学が必要な人材をどう評価するか、高校教育と大学教育の継続性をどうするか見直す必要がある。

(尾崎委員)

○ 高校での教育は、大学で学ぶのに必要なものを身に付けることが必要。しかし、現実には、経済学部なのに数学を知らない、大学で補習しているとも聞く。その間を接続する入試は、選抜の論理で行われており、一発でやる限りはそうならざるを得ない。大学で学ぶ能力が身に付いているかよりも、他の人と差別がつく形で行われ、知識の多寡などで入試が行われている。これが、入試に受かっても、大学教育についていけない状況のひとつの原因。能力の確認と選抜の論理をどう整合させるか。やはり一発で選抜するのは限界がある。高校段階で複数回試験を実施して能力を確認するのはあっていい。その結果を総合評価の半分にし、残りは大学ごとの入学試験にするとか。さらに、試験結果のどこにウェイトを置くかを大学に選ばせてもいい。能力が身に付いているかを判定するような全国共通の問題を英知を集めて作ればよいと思う。

(大竹委員)

○ フィールズ賞をもらった人に新聞記者が取材し、100点満点で大学に入学したのかと思ったら0点だったという話を聞いた。解き方に天才的な面が見受けられたため入学を許可されたということであった。非常に異能、異才を発掘して、育てる文化を日本に創り出すことが極めて重要。

15年前に富士ゼロックスの元会長であった小林陽太郎さんとアスペン研究所を日本に導入した。高校生も古典から学び、早い時代から思想哲学を身に付けてもらっている。高校時代から深い教養を認め、将来、大学で花開く、あるいは社会に出てから貢献できる人材にしていくということも議論していきたい。

(曾野委員)

○ ○×式が学校の答えの中に入ってくるようになった頃から、私は絶望した。これは人間として複雑な心情を伝える答えになっていない。日本語を駆使して答えるべき。先生方、教育組織が忙しい生活に堪えなくなり、学校の先生も作文の時間にいちいち作文帳を読まなくなった。昔の先生は、生徒が書いた作文帳を何十冊も抱えて、重いのに、下手なものでもよく読んで批評してくれた。今の日本では、デパートに行っても床屋に行っても、日本語をまともにしゃべれる人が居ない。せめて日本人と日本語で話をしたい。型通りのマニュアルの返答しかできない。主体的に学ぶなど非常に高級な感覚を持った人がクラスに何人いるか、極めて例外的ではないか。

今お話に出た自分がかげがえのない人間であるという感覚は、私には分からない。自分が死なないで、どうしたら生きていいかと考えながら生きる人間も、やはり人間なのだ。自分がかげがえのない人間だと思う人とは私はどうてい付き合えない。どうやったら自殺しないで、首をくくるのも迷惑だから生きても普通なのだ、お父さんとお母さんが貧しければ、将来自分が稼いで親に米代くらい届けねばなるまいというところから自分の存在の認識を考えるのであって、かけがえのない人間だなどと思いだしたら、どれだけ狂うかわからない。まず、日本語で学業、人間の評価をできるように、早い時代からの作文教育を

みっしりしないと、入試の方法に〇×式を残す限り人間評価はできない。

(武田委員)

○ 自分自身が、高校でも大学でもスポーツの推薦入試で受験をしてきて、その際、スポーツ選手はスポーツに割く時間が大変長いので、8月末まで遠征に行きながら9月14日に受験ということもあった。正直なところ、やっていれば受験勉強は少なくてもいいのだという生徒も多いのではないかと自戒を込めて思う。

到達度テストについては、自分の到達度を知れば意欲につながるもので、良いことだと思う。ただ、勉強時間が無くても国際的に活躍できる人材を育成するためには、受験にも、ちゃんと就職テストにあるような、テーマを与えられて話すという、そのような能力が必要になってくるので、そのあたりも検討に加えていただきたい。

(佃副座長)

○ 高大接続というタイトルはあるが、接続はしていない、完全に分離であるという意識が大事ではないか。接続してはいけない。高校までの教育は、社会人として60年生きていくための基本的な資質を養うために高校までで完結するものである。大学は専門家をつくる場所。大学の入試は、学習到達度テストを評価しながら、どの程度評価するかは大学のキャラクターによって変えていい、入試そのものもどういう専門家を大学が作るかという思想によってバリエーションがあって良いのではないか。高校と大学は接続しないという考えに賛成。

(加戸委員)

○ 基本的に、大学がどんな学生を求めているかは理解できるし、論文を課す、英語のヒアリングをするなど独自の方法は良いが、少なくとも高校で学習指導要領に基づいた教育を受けて、高校で100満点の人がいても、大学受験で合格するとは限らない、特殊な対策を勉強しないと合格しない、6・3・3・4制ではなく、6・3・3・1・4制になっているという実態がある。この現実をどう受け止めるか。高校は高校、大学は大学という話ではないと思う。高校をベースにした入学試験ということに関しては高校教育を大切にしたい。高校が正常に教育できるような形で、直すべきは大学入試問題である。

(佃副座長)

○ 大学側が到達度テストをどの程度評価するかは大事な問題。到達度テストを80%、独自の入試を20%とするなどバリエーションはたくさんあるという言い方をした。高校の教育を軽視するわけではない。

(川合委員)

○ 大学入試は高校教育のゴールではなく、高校教育は要素や項目として大学の教育につながっている。それを生かす接続の仕方を考えるべき。そのためには、例えば、大学教育でも高校で履修済みの項目があれば大学の教育期間を短縮可能にするシステムにつなげるべきだろう。大学入試を最終目標とするのではなく、高校教育は大学教育の前段階と位置づけ、教育内容をつなげていくことが高大接続で一番重要。

(山内委員)

○ 大学は、高校での教育に無関心ではない。入試に関わる出題プロセスは大学の最大行事のひとつであり、各教科の出題委員は相当な努力をして、高校の教科書を精査し、大学入試に出される頻度の問題を精査し、教科書の作成に当たっている高校の先生に直接、間接にあたって、現場と接続しようという意識はある。才能ある子を入れるという努力も現行制度としてはしている。また、高校生を対象としたセミナーや講座を開いている大学も多い。

私自身、高校3年で、文転と言うが、理科系から文科系に移った。資質や才能について、自身で知らないことは生徒たちには多い。それを周囲や先生の力で進路を考える。自分だけで悩まないで親身になって相談に乗ってくれる雰囲気はどう作るかが私の夢である。

夢と「志」の違いは、国や国民のためといった高いレベルで夢を現実に変えるために実践する方策を具体的に考えるところに「志」がある。一般の教育においても、「志」を育てるプロセスを大事にしたい。

(河野委員)

○ 高大接続は、大学教育と高校までの教育、これを一体として捉えることが大切。義務教育も、これから議論する中でかなり影響がある。

余談になるが、第三次提言についての報道では小学校の英語の教科化が一番大きく取り上げられた。義務教育は国民全体に関わり、関心が高いことの表れではないか。現状のまま英語が教科化されることに戸惑いを感じる教員も相当いたのではないか。

小学校での英語の教科化を実効あるものにしていくには、先進的に取り組んでいる自治体を検証した上で、目標を明確にし、指導體制の強化、指導内容・方法の研究、教材・教具の充実、評価の在り方等について、丁寧に議論することが必要。

今、高校生の学力が二極化している状況があるが、これは高校教育だけの問題ではない。当然、義務教育で学ぶ意欲をどう喚起するか、基礎学力の充実を図ることが大事。義務教育段階における個に応じたきめ細かい指導を可能にする指導體制の強化、教育環境の整備もあわせて提言に盛り込むのであれば、議論をしていく必要がある。

高校の先生に聞いたが、今の高校生に欠けているのは自尊感情。学歴への信仰がだんだん薄れている中で、何のために学ぶのか大義を持ってない。そして、自信も感じられない中で、いかに構築していくか。そういった子供たちの心の問題を考える必要がある。

(佐々木委員)

○ ある調査の結果で、日本の6～7割の中高生が「自分のことをダメだ」と思っていたり、また、親や先生を尊敬できるかと質問に、2割程度の子どもたちしか尊敬できると答えないという内容のものがある。日本の教育で一番正していかなければいけないのはこのことではないか。何のために生きるのか、何のために勉強するのか、何のために学校に行くのか。学校に行って何を学びたいのか、どうしたいのかということを考えたり、思想や哲学を持ち、そして志を立ててやっていく。このことが一番大切だし、本来問われるべきだと思う。

そういったことが入試の選考の中にないと、どうしても知識や学力を中心に、それこそ1点刻みで評価されるものになっていく。今行われている入試は、ある意味公平だろうが、公平の名のもとに学力だけで推しはかるということが、いかに子どもたちの生きる力、や

る気を減退させているか。

先日、スウェーデンに教育視察に行ってきた。日本もスウェーデンの教育や教育制度から大いに学ぶことがある。大学においても授業料負担がなく、ずっと学ぶ意欲を持って学んでいる子どもたちも多いため、大学進学率も高い。イノベーション教育も進んでいる。高大接続や入試に関しても、今までの主に学力のみを問うペーパーテストでは測れない、志などそういうところをきっちりと見ていくことが子どもたちにとって最も大切ではないか。そういったことが積み重なっていくことで、世界に貢献する日本人が生まれ、今以上に日本が世界から尊敬されるようになるのではないか。

(鈴木委員)

○ 一発勝負の試験は決して悪いものではない。それぞれがそれぞれの形で努力し、頑張って勉強して一発勝負に臨んでいく。センター試験も非常に評価が高く、特に英語などの内容は、現場からも評価されている。

AO・推薦入試は生徒たちを確保するという形で出てきて、間違った方向に進んでいる。大学が乱立し、手をかえ品をかえて現場の高校に触手を伸ばしてきており、現場の混乱の要因になっている。その辺に教育再生のメスが入らなければならない。

高校は教育活動のほかに部活動がある。高校生たちは部活と学習を何らかの形で両立させる形で頑張っている。その部活動がぐちゃぐちゃになってしまわないように、又は部活動をあえて高等学校の教育現場から社会教育の分野に移すということもあわせて議論を進めたい。

(遠藤議員)

○ 最終的に到達度試験を採用するのは大学であり、大学が自分達はこういう学生が欲しいということを踏まえて独自の試験をやればいい。

先ほど鈴木委員が話したような大学は、一人でも多く入った方がいいわけで、試験などなくていいという大学もある。

しかし、世界に活躍できる大学、仄聞だが、ハーバードなどは全国に十数人のスカウトマンがいて、ずっと1年間の活動等も見て、ひとつの高校からは数人しかとらない。例えば灘や開成みたいに東大に何十人などはない。いろんな人間を大学から集めてくる。日本は受験のテクニックだけうまい人を大学が集めてしまっている。大学が自分たちの責任でいい人材をとるという責任を果たしていないのではないか。

(富田衆議院議員)

○ 安西先生のペーパーにある、さまざまな事情や環境により機会均等が損なわれたりすること等がないように大学入学者選抜での公正さが保たれるよう十分配慮すべきとは、そのとおり。今週火曜日に衆議院で成立した子供の貧困対策法案には、子供の将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう教育の機会均等を図るとある。神奈川県調査では、生活保護を受けている人の4割が高校中退か中卒。親も生活保護を受けていた人もいる。親から子への貧困の連鎖を断つには学びの支援が大切。この学びをどう考えるは今後の国の役割。意欲のある子供たちが大学教育を受けられるような高大接続も考える必要がある。

(曾野委員)

○ 教育の要素が何かというのを非常に形式化されてきているように思う。つまり、ビスケットの型のように、いい型があって、よき材料を入れて適切な温度を加えるといいビスケットになるというような感じがしてしょうがない。

スウェーデンの制度はいいのだと思うが、私は「安心して」という言葉が大嫌いで、全ての若者たちが大学に安心して行けるように、安心して生きられるようになったら、どんどん人間は墮落する。また、生まれ育った環境に左右されることは私たちにとって財産。貧しければ貧しいように、目が見えなければ見えないことをもって、虚弱であれば虚弱で、生まれ育った環境に左右されないようにするなどは、教育に真っ向から反対する問題と思ってきた。

もちろん、それが本流でなくてよくて、みんなが幸せで安心して生きられることは良いと思うが、その説に私は反対。自分が生まれた環境・時代を受けとめて、たえず逆境に耐えられるようにするのが教育だ。

(山内委員)

○ 受験テクニックに長けた子だけが東京大学に入ってくるという部分の誤解は解きたい。

努力の過程、プロセスも大事であり、その中の一つにテクニックもあるかもしれないが、それだけでは突破できない。ハーバードのような私立大学と、東京大学のように明治以来の帝国大学は随分違いがあるが、東大も根本的に変わるべきだという御説はもっともである。

東京大学が東京という名の地方大学化し、受験有名校、進学校の出身者だけで固められると発想や行動がパターン化する。これは望ましくない。全国津々浦々の公立高校から人材を集めたい、そういう大学を目指すことが望ましい。

(安西部会長)

○ 今、大学も高校も内情は本当に大変な状況で、入学者選抜についても、とにかくこの機会に高校、大学、高大接続を、これからの時代に向けてこうしていきたいのだということを、この会議で声を上げていただきたい。

AO入試はダメとか言われるが、AO入試自体がダメなのではなくて、そのやり方、中身の運営の仕方の問題と考える。

これからの時代の日本を背負っていく人材をつくっていくには今しかない。

(鎌田座長)

○ 高大接続、大学入学者選抜の問題は、大学がとりたい人間をどうやってとるのが最も適切かという側面と、初等中等教育の在り方を規定する側面もある。初等中等教育の在り方の議論と両方の側面から検討すべき。

フランスのバカロレアは哲学の全国1位の論文が『ル・モンド』に全文掲載されるぐらいのすばらしいものである。しかし、日本のような入試をやりたいとも言っている一流大学の先生もいて、オールマイティはなかなかない。難しい課題であるが、これから少し時間をかけて議論を重ねていきたい。

○ 閉会に当たり、下村文部科学大臣兼教育再生担当大臣から挨拶があった。

高大接続・大学入試の在り方についての議論をスタートということで積極的な意見があり、議論すればするほど難しい問題であるが、本質的に大変重要なことである。

冒頭、安西先生からお話いただき、その内容にほとんど共感している。こういう方向で議論することが必要。

そもそも何のための大学入試かという思想や理論といった本質的なもののコンセンサスをつくり、それからあるべき大学入試について議論すべき。

2つの点で、大学入試を変える必要がある。

ひとつは、今までの大学入試は、近代工業化社会を支えるために有効な手段であったが、日本だけではなく先進諸国は全部、その次の時代に移っている。あるべき大学教育、高校教育、未来における教育の在り方は何なのか議論していく必要がある。

もうひとつは、一国主義的な入試ではなく、グローバル社会の中での入試の在り方を考える必要がある。安西先生の言われたように、人材育成と人材獲得は主要国の国家戦略。これは国家主義的な意味の国家戦略ではなく、その国の豊かさというのは、その国の一人一人の国民の豊かさが結果的に国の豊かさであり、国民一人一人の豊かさは教育によってつくられるということ。教育によって一人一人の豊かさをどうつくるか、どうバックアップするかが問われる。そういう前提で、今の入試は、一人一人の国民、学生の目指すべき方向に合ったものになっていないのではないか。現在の一発試験的なペーパーテストだけでない能力のほうの世界の中で常に問われている。つまり、真に世界の中で通用する、日本の社会の中で幸せに生きていくことに資する大学教育が求められ、大学もこれから大きく転換しなければ通用しない時代に世界がなっている。

また、大学入試の位置づけが高校以下に影響する。学校によっては、入試に合格するための教育に特化しているが、そもそも入試そのものが社会の物差しとずれている中で、相変わらず高校以下でそういう教育をするのは、日本の将来の教育にとって望ましくない。入試の在り方を考えることは当然高校以下の教育について考えるということであり、入試の在り方そのものの提言が大学教育や高校以下の教育まで変えていくような提言にしていただければ大変ありがたい。

次に、報告だが、本会議の第一次提言を受けた取組として、運動部活動の体罰の問題について、文部科学省では、3月に有識者会議を発足させ、スピーディに議論を重ね、先月27日に運動部活動での指導のガイドラインをとりまとめた。

今後、このガイドラインを各学校に配付、周知し、体罰は決して許されないと意識を徹底し、体罰を根絶するとともに、適切な内容と方法により運動部活動の指導が行われるよう努めていきたい。

この教育再生実行会議で提言をされた内容をいろんなレベルで次々と達成するように努めており、報告したい。

○ 座長から、第10回会議においては、外部有識者から諸外国の高大接続・大学入試制度についてヒアリングを行う旨の発言があり、引き続き、高大接続・大学入試の在り方について議論することとされた。また、7～8月にかけて、高大接続や大学入試について特色ある取組を行っている大学等への視察も行って、概ね9月頃までかけてこのテーマに取り組む旨の発言があった。